



【イエス・キリストの復活を信じる幸い】

本日聖書本文:ヨハネの福音書20章19-31節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev. Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさん！先週主イエスキリストの受難週間はいかがお過ごしでしたか。今日はイースター感謝礼拝として捧げる主日の朝です。イースターおめでとうございます！

「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。『平安があなたがたにあるように。』こう言って、イエスは手と脇腹を彼らに示された。弟子たちは主を見て喜んだ。」(ヨハネ20章19、20節)

イースターの主日の朝、復活の当日の弟子たちの姿を思い巡らします。扉を閉じ、鍵をかけ、部屋の中に閉じこもっていた弟子たち！彼らの心もまた恐れと不安の中で閉ざされていたことでしょう。しかし死に打ち勝って確かによみがえられた主イエスキリストは彼らの真ん中にお出でくださいました！そして「平安があなたがたにあるように！」と仰ってくださいました！本日イースター主日の朝、愛する教会の兄弟姉妹皆さんのおひとりひとりのもとに、ご家族のもとに、復活の主がお出でくださることを信じ、待ち望みます！そして主イエスの十字架の傷跡を前に「弟子たちは主を見て(大いに)喜んだ」とあるように、今までそして、これからの人生に対しても様々な不安と恐れにかかえている私たちに、この主にある喜びと平安に包まれることを信じ、待ち望みます！

歴史上イエスキリストの復活以来、本日に至るまで、主の始めの日となる毎日曜日の礼拝が続き、その毎週の主日礼拝を通して、よみがえられ、ともに生きておられ、臨在される主イエスキリストを体験して来ています。

願わくは、本日の主日礼拝の中でも、よみがえられ、今も生きておられる主イエスキリストからの豊かな恵みと祝福が集っている我らの上に豊かに注がれますようにお祈り致します！アーメン！

＜1. 弟子たちの中で最後にイエスキリストの復活を信じるようになったデドモ・トマス＞

みなさんは、イエス様の弟子たちの中でも、最初イエスキリストの復活を信じられなかったことをご存じですか。

特に、最後までイエスキリストの復活を信じられなかった弟子の中一人がいました。

今日の本文に出ているトマスと呼ばれた弟子でした。人々は「疑い深いトマス」とも言われて来てますが、**本文24節**によると、実際トマスのあだ名は「**デドモと呼ばれるトマス**」であったことが分かります。この「**デドモ**」の意味は「**双子**」という意味でした！最近双子がめずらしくないですが、むかしはとても珍しくまれだったようです。おそらく、一卵性(いちらんせい)の双子だったのではないかと思います。彼は誰よりもずっとイエスキリストの弟子として従っていながらも、とても現実主義者でした。

トマスは目に見えたとしても自分の手で触って確認できなければ、なかなか信じようとしませんでした。そういうわけで彼は結局、イエス様の弟子たちの中で最後にイエス様の復活を信じるようになります。

今日の本文の箇所はヨハネの福音書の結論の部分です。使徒ヨハネがこの偉大な福音書の結論の部分にトマスの話でまとめている事はとても意味深い事でしょう。イエス様の弟子として一番身近で、今までイエスキリストが神の御子としてなして下さった様々な奇跡やしるし、行いと御教えを見て来たのにも関わらず、トマスはイエス様が事前によみがえれることをいくら教えても、心から信じませんでした。死んだら、それが最後であり、もうすべてが終わりである彼の頑固な信念があったため、実際にイエスキリストが預言の通り、十字架に付けられ死なれ、そして、三日目に復活されても、ずっと疑いながら、信じられなかったと思われます。しかし、そんな彼が、最後によみがえられたイエスキリストと出会ってから、その疑いが変わって心からイエスキリストの復活を信じるようになり、イエスキリストを真の神の御子であられ、救い主として確実に信仰告白をする過程を詳しく記録させています。それはいくらトマスのような人であっても、生きておられるイエスキリストによって変われること！トマスのように信じるようになることを神はそのメッセージを与えて下さっているのではないのでしょうか！

それでは今日の本文の中で、個人の信念と思いが頑固(がんこ)で、とても現実主義者だった弟子トマスがイエスキリストの復活を信じなかったのに、どうやって信じるようになったのか、今日の聖書本文に共にもう一度確かめて見ましょう。今日のヨハネの福音書20章19節から見ると、最初はイエス様の弟子たち全員が、イエス様の復活の出来事に対しはだれもなかなか信じなかったことが分かります。もう十字架の上でイエスキリストが死なれたことで、弟子たちの信仰も十字架まで終わってしまったようです。

しかし、安息日がすぎた翌日の日曜日の夕方、弟子たちが集っていた時、そこに復活されたイエス様がおいで下さいます。そこにいた弟子たちはよみがえられ、十字架で釘付けられた両手と槍で刺された脇腹を見せて下さいながら現れた復活のイエス様を拝見して、イエス様がまことに十字架に掛かれる前おっしゃった通り、三日目によみがえられた事をそこで集まっていた弟子たちみんな信じて、大いに喜び感激しました(20節)。

ところが、今日の本文24節を見ると、そこにイエス様の弟子一人が抜けていました。その弟子が今日の本文に出ている弟子トマスでした。後で、イエス様の弟子トマスは一人、二人ではなく、トマス以外の弟子たちみんなから、イエス様が間違いなくよみがえられた姿を見た(25節「**私たちは主を見た**」)証言し、証を何度も聞きながらも、弟子トマスはなかなか信じられませんでした。まず、弟子たちがみな集っていたその時、どうしてトマスがそこにいなかった事に注目して見る必要があります。何か事情があったかも知れませんが、後彼の姿勢を見ると、わざと最初は、弟子

たちの集まりに行かなかった可能性が高いのではないかと思います。

イエス様の十字架の前では信じて来た信仰も、希望を失い、怖くて弟子ヨハネ以外にみんな逃げていた弟子たちがなぜ再び集まっていたのでしょうか。その理由は、イエスキリストが葬られていたお墓からの驚く出来事を聞いたからでしょう。ヨハネの福音書20章1-3節を見ると、「1さて、週の始めの日、朝早くまだくらいうちに、マグダラマリアは墓にやって来て、墓から石が取りのけられているのを見た。2それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛されたもう一人の弟子(ヨハネ)のところに行って、こう言った。「だれかが墓から主を取って行きました。どこに主を置いたのか、私たちにはわかりません。3そこで、ペテロともう一人の弟子は外に出て、墓へ行った。」

みんなが集まった日曜日の朝、まず、イエス様の弟子ペテロとヨハネは、マグダラマリアからイエス様のお墓が空っぽになっていたことを伝えられ、実際行って見ると、確かにイエス様のお墓は空いているのを目撃して、自分たちのところに帰って行った(10節)。しかし、その後、もう一度イエス様のお墓に行って泣いていたマグダラマリアは、そのお墓の前でよみがえられたイエス様に会った証言を、また弟子たちに伝えました！

イエスのお墓が空になっていること、そしてマグダラマリアのイエス様の復活の証言！これは弟子たちにはとっても大きな出来事であって、この事実をもっとくわしく確認するために、散らされ、それぞれ隠れていた弟子たちのところに連絡し合って集ったわけでありませぬ。しかし、そこにトマスは見えなかったのです。トマスがそこにいなかったことに対して、単純に彼に連絡が届かなかったかも知れませぬ。

弟子トマスが復活されたイエス・キリストに出会った弟子たちに言った言葉や、以前イエス様にトマスが言った言葉などを考えて見ると、実はトマスにとっては、よみがえられたイエス様についてのマグダラマリアの証言や後の弟子たちの証言があっても、復活自体を信じないもっとも強い現実主義者であったことが分かります。

トマスはきっと ‘イエス様が生前そうおっしゃったけど、復活なんて、決してそんな事は現実的にありえん！’と。

ヨハネの福音書11章で見ると、イエス様が病で亡くなったラザロの伝言が届いた時、なくなって数日が経っていた彼を生き返らせて下さいました。その奇跡を起こして下さる前、ここで弟子トマスが登場します。イエス様はラザロがなくなった知らせを聞いても、ラザロが住んでいたユダヤ地方に行かれようとした時、

弟子トマスはイエス様を止めようとしてしました。もうすでにラザロがなくなって4日間も経っているので、もう死んでおわっちゃったから、イエス様が行かれても無駄だし、イエス様をいやがるユダヤ人たちも多く、イエス様が来るのを待っていたうわさもきくと聞いていたので、ユダヤの方に行かれると、もしかして害を受けるかも知れないと思い込んでいたトマスは「我々も行って、主といっしょに死のうではないか。(ヨハネ11:16)」と落胆し、絶望的に言います。

ここでトマスの表はイエス様の弟子という立場でしたが、まだイエスキリストへの信仰はなく、相変わらず非常に自分の信念と考え方が強く、この世の中の現実ということだけしか大事に思わなかった人である事が分かります。

しかし、それにもかかわらずイエス様がユダヤに行かれたら、トマスもその気にならなくても、イエス様を離れず、ついて行きました！これがトマスのイエス様の弟子の一人になれた良い点でしたよね！トマスは、自分の考えと信念が強く頑固であっても、自分の願いと考えと違っても、今自分が尊敬し、愛していたイエス様が行かれるなら、従ってついて行きました。

<2. 人々がイエス様の復活を信じられない理由>

トマスの姿を通して、人々がなぜイエス様の復活を信じられないのかその理由を考えられます。

一つ目はトマスのように、目に見える現実だけが全てだと思こんでいる人には、信仰の世界や霊的なこと、死後に対する思いや信仰がないため、当然、イエス様の復活は信じがたいでしょう。一週間の間、ずっと考えている事がお金を稼ぐこととか、この世の物や人の事ばかりなら、ある日、突然、主の復活に対する話を聞いた時、とんでもない話をするなど反応するしかないかも知れませぬ。その人の頭には死についても考えたくないし、考えたことがないのに、死んだら、もうすべてがおしまいなのに、復活についていくら聞いても、教えられても、まったく入らないのではないのでしょうか。

死についてさえも、考えたことがない人に死後のことや復活についての話が耳に入るわけがありません。周りに実際愛する人が死を迎えたとか、近くの人が急に召される衝撃を受けてから人はようやく人は真剣に人間の死について深刻になり、ようやくその死後のことについてどうなるのか、全て終わりなのか、死んだら、どこへ行くのかなど永遠の事に対する話を聞き入れるようになります。

ですから、人は死と復活を自分とは関係ない遠い話として扱ってしまうのです。人はまだ人の人生に対してもすべて分からず、理解できないことが一杯なのに、どうやって、神の御業と次元を頭ですべて理解し、知ることが出来るのでしょうか。ですから、人の知識と頭で全てを理解するのは決して無理で、限界があるので、それを越えたことに対しては、信じるしかないし、信じる姿勢が必要になるのではありませぬか。

一方、弟子トマスは自分の頑な考えと信念があまりにも堅くて、自分の論理や考え方以外には受け入れようとしな

とても自己中心的な思考を持っている場合もあります。自分の思考と論理のみがいつも正しくて、合理的な考え方が思いこんで、自分の論理と哲学、思い込みを持っている知識などをやぶろうともしません。

たとえば、ある人は思考(しこう)の中心が自分にあります。要するに自己中心的です。すべてを自己中心に考えます。その人は物事においてもいつも自分のやり方を通そうとします。何か悪い思いがあるからではありません。ただ、すべてのことを自己中心に考え、今まで自身が経験したことや納得できたことそれが、いつも正しいという基準を持っているからです。他の人が自分の考えと違った行動を取ると、自分が否定されたかのように、裏切られたかのように感じ、その人と心の壁を作ってしまう。その人はいくら正しくても、だれがどんな話しをしても、自分の固執(こじつ)的な考えと違うと受け入れません。ある人々はまるで、自分の世界に閉じ込められている王のようです。

これを心理学的な用語で、ナルシシズム(narcissism)と言います。自分の中に、ある世界を作って置いてその中で君臨(くんりん)し、その中ですべてを考えます。ところが、ある新しい事実や情報が聞こえられると、自分だけの世界を破りたくないため、それが事実であろうとなかろうと拒否してしまいます。

今日の聖書の本文では、ほかの弟子たち全員が復活されたイエス様に出会ったと証言して言っても、トマスは何と言いますか。「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」(25節)と強く言います。今他の弟子たちが甦(よみがえ)られたイエス様に出会ったという言葉はトマスは自分の常識をはるかに超える話なので、それが事実であろうが関係なく、信じまいということです。それとも自分は現実(げんじつ)に自分が見ても、触(ふ)ってもないので、とんでもない話であるかのように扱(あつか)っているのではないのでしょうか。

その理由は何ですか。

トマスの心の奥底にはすでにイエス様の死について自分の思いと整理(せいり)がもうついた！ので、‘主はすでに死なれた。もうイエス様とはすべてが十字架の上で終わった。もうおしまいの話しは私と関係がない、無駄なことだ！’

トマスは今変化を拒否(きよひ)しています。自分の世界を破(やぶ)ってそれより大きい事実を受け入れまいと拒(こ)んでいるのです。

彼は続けて自分だけの世界にとどまりたがっていました。もし、イエス様が再び会(あ)って下さらなかつたなら、彼のこのような態度のため、彼はどうなったのでしょうか。おそらくトマスはひどいナルシシズムの被害者となっていたかも知れません。今日私たちにもある程度トマスのような傾向はないでしょうか。

愛する信仰の家族のみなさん！今日我々は神様の御言葉を聞く前に、まず自分をかえりみる事がどれほど大切なのか分かりません。自分の心に神様の御言葉が入れる空間(くわんかん)がなければなりません。自分の思いにすでにいっぱいになっている人にどんなに熱心(ねつしん)に神の御言葉の真実(まじつ)を話しても、説明しても入(い)るわけがないからです！

今トマスは二つのすべてに当てはまります。彼の頭にはイエス様の死の後の事、特に復活の出来事は入力(いりか)されていませんでした。ただ、彼には肉体(りくたい)のイエス様だけが自分に意味(いみ)がありました。イエス様が十字架(じゆうじゆう)にかかって死(し)なれると、そしてよみがえられる事を何度も言われても彼は認め(たづ)めたくなかつたかも知れません。その理由はトマス自身がそれを望(のぞ)まなかつたからかも知れません。結果(けいこ)トマスの強い思いと頑固(がんこ)な固執(こじつ)が、彼をイエス様の復活(ふくたつ)を信(しん)じる事を妨(さまた)げ、一番遅(おそ)らせたのです。

<3. 日曜日の夜トマスの為再びおいで下さる復活のイエスキリスト>

もう一度本文に戻(かえ)ってみましょう。イエス様に出会(あ)ってから一週間の間、弟子たちに復活されたイエス様はまた現(あ)れませんでした。イエス様に出会(あ)ってから一週間(A week later)経(た)ってユダヤ人たちの祭(まつり)は終(お)りました。すべてのユダヤ人たちはそれぞれ自分たちの故郷(こきやう)に戻(かえ)ります。なのに今日の本文26節を読むと、弟子たちはふたたび集(あ)りました。今回は前回と違って、トマスも一緒にいます。きっとイエスキリストの復活(ふくたつ)に対しては強い疑(うたが)いと不信感(ふしんかん)を持(も)っていたトマスに八日間、他の弟子たちが祈(いのち)りながら、諦(あきら)めず、何度も強くトマスに誘(いざな)ったのではないかと思(おも)われます。

‘前回も我々が一緒に集(あ)まっていた時に、復活されたイエス様がおいで下さったから、もう一度我々みんなが一緒に集(あ)まっていると、また、イエス様がおいでくださるかも知れない。’という期待(きたい)が弟子たちにあつたのではないのでしょうか。すでに甦(よみがえ)ったイエスと出(で)会い、信(しん)じていたの弟子たちは、トマスを今回(こんかい)こそ一人(ひとり)にさせませんでした。

ほかの弟子たちにはその強い期待(きたい)と望(のぞ)みがありました。

“主よ。先日は我々に来てくださいました。しかし、その時一人トマスが抜(ぬ)けていました！ああー主よ。まだトマスは主の復活(ふくたつ)を信(しん)じていません。我々の力(ちから)では彼(かれ)を説(し)得(とく)するの、納(な)得(とく)させるの、信(しん)じさせるの何もできませんでした。どうか主(き)がトマス(トマス)をあわれんで、顧(か)みて下さい。どうかよみがえられた主(き)が再び来(こ)られ、トマスのすべての疑(うたが)いを取り除(と)き、我々と同じように、復活(ふくたつ)の主(き)を再び迎(むか)え入れ、信(しん)じることが出来るようにお出(で)下さい、どうか助(たす)けてください。”

そして、よみがえられたイエス・キリストが弟子たちの祈(いのち)り通り、その望(のぞ)み通りに彼らにたずねて来てくださいました(26節)。復活されたイエス様は以前(いぜん)と同じくお出(で)てくださいました。そして、まだ不安(ふあん)と恐(おそ)れの中にいた弟子たち(26節)にまず“平安(へいあん)があなたがたにあるように”と平安(へいあん)を与(たま)えて下さいます。ここで甦(よみがえ)られたイエス様に出(で)会う時、現(あ)される一番確(た)実(じつ)な現(げん)状(じょう)は我々(われわれ)の中(なか)にある葛藤(かっとう)と疑(うたが)いと不安(ふあん)が消(き)え去(さ)り、心(こころ)は神(かみ)の平安(へいあん)が与(たま)えられ、満(み)たされる事(こと)でしょう。

今日、我々は先に信じていた他の弟子たちの姿勢から学ばされるべき一つがあります！

それは、すでにイエス様の復活(ふくたつ)を信じているほかの弟子たちは、疑(うたが)っているトマス(トマス)を非難(ひなん)しなかつたことです。

彼らがやったことは一週間トマス(トマス)のために、祈(いのち)りつつ、再び集(あ)ったことでした。トマス(トマス)が復活(ふくたつ)のイエスキリスト(イエスキリスト)と出

会えるように、信じることが出来るようにするために、他の弟子たちはよみがえられたイエスキリストに助けを求めつつ、出会わせて下さるようでした。ほかの弟子たちはイエス様の復活を信じないトマスを一歩取り残させなかった事です！

みなさんはイエス様の十字架と復活を信じますか。まだこの事実を信じないで、いやまだ信じられないでいる方々が我らの周りにも多くいるのではないのでしょうか。私たちも弟子たちのように、その一人の信仰のために、甦られ、今も生きておられるイエス様が彼らの疑いや固定観念や不信を取り除いて、信仰と確信へと変えてくださるように諦めずに祈り続けましょう。

そして、イエスキリストの御名によって一緒に集まるところに、その人々も誘い、共におられるイエスキリストの愛と恵みを、力をともに体験させる機会を与えることが大切です！その意味として、主日この信じるみんなが集まるこの礼拝の時や、毎週各家々で集まる家の教会の集いもどれほど大切なかわかりません。

我らはただ、まだ復活の主と出会っていない人々をイエスキリストに導き、イエス様を体験出来る機会を与えることが先に信じている我々の愛の使命であると信じます！

復活されたイエス様がトマスに現れて言われた言葉は何ですか。(27-28節)

25節で、トマスが言った通りに再び来られたイエス様はこう言われます。まるで、主がトマスのそばにいて彼が言った言葉や心の思いを全部聞いて読んでいたかのように言われているのです。トマスは当然びっくりしたはずですが！

復活されたイエス様は生きておられるだけではなく、彼がどこで何を考え、何を話したかまですべてご存知でした。イエス様はトマスの言った言葉を一つももらすことなく、指でイエス様の釘付けられた手を触るようにと言われます。「27節—あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

ここでみなさんに一つ質問します。トマスははたしてイエス様の言われたとおりに十字架での主の手にあった傷とわきにあった傷をさわったのでしょうか。それとも触れなかったと思いませんか。聖書にはトマスが実際に主を触ったのかどうかについては具体的な言及はありません。しかし、私の考えではトマスは主を直接触れなかったと思います。なぜなら、すでに目の前に間違いなく、以前のイエス様が現れたからです。そして、そのお言葉のためだったとも思われます。すでに主はトマスが何を話したのか、どんな思いをもっているか、どんな状態にいるかをすでにご存知でした。ついにトマスの心の頑なな壁がくずされ、よみがえられたイエス様を心から信じるようになります。そして、ついに心から‘私の主、私の神’と告白するようになりました！

<4.見ずに信じることが幸いである理由：御言葉を聞いて信じる＝神が約束された救われる真の信仰！>

神はトマスの告白をヨハネの福音書全体の結論として用いて下さいました！ヨハネの福音書全体の結論が本文28節に、“イエスは私の主、私の神よ。”という告白です。その後、イエス様はトマスに何と言われますか。

29節「イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです」そして最後の31節に使徒ヨハネを通して神様はこうまとめて下さいました。

「これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」

ヨハネの福音書の目的は何ですか。イエス様が神の御子であることを人々が信じ、永遠のいのちを得るためであることです。この聖書の出来事や御言葉を信じるだけで、その人に神は永遠のいのちを得るという約束です。

*弟子たちがイエス様のお言葉で信じることと、主が直接現れて十字架の傷を見せ、触らせて信じることにはどんな違いがありますか。直接見て信じるのを可能ですが、真の信仰というならば、直接見なくても、体験しなくても、言葉通りに聞いて信じることが出来るのではありませんか。(人間の信頼と愛の関係＝聞いている言葉通り信じて上げる！直接実際全部見ないと信じられへん？＝疑いを元にして、確かめ、信頼しようとしている事：)

神の救いのご計画とイエス様の望みは何でしたか。神の約束の聖書の御言葉を聞いて、すでに信じた人々の証しを通して、心からイエスキリストを神の御子として、我らの救い主として受け入れ信じることでした！

トマスがすでにイエスキリストの言われたお言葉と、他の弟子たちの証言を聞いた言葉で、イエス様の復活を信じることでした！聖書が言っていることは何ですか。イエスキリストは我々が聞いているこの神様の御言葉、聖書の証を通して我々に永遠のいのちを与えて下さると約束されています。この神の御言葉聖書では、我々に、我らの全ての罪を背負ってイエスキリストが十字架で死なれ、信じる全ての者に神の御救いを、永遠の命を与える証拠として、イエスキリストよみがえられた真の神の御子であられ、救い主であられることを明確に証しし、教えてくださっています。

愛するクリスチャンブレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！人はよく目に見えるなら、信じますと言います。神の存在が見えないから、信じがたいと言います。愛するみなさん、人間の目というのは、どれほど確かなもの何でしょうか。人間の目が見える世界はどこからどこまで何でしょうか。

例え、人の目がその自体だけじゃなく、可視光線(かしこうせん)によって、見ることができます。つまり、光の助けがなければ、目があっても完全に見えないでしょう。光の助けがなければいくら視力が2.0であっても、全てが見え

るわけではないでしょう。私たちの目というのは、光が実は助けてくれなければ見えないものでしょう。しかも、人の目は、紫外線(しがいせん)などを省(はぶ)いて見えています。だから、特殊な機械で見ると、肉眼(にくがん)では見えない世界が見えるようになるでしょう。ある意味で見える世界だけを信じるというのは、とても愚かな話してはいいでしょうか。光というのにも、色々な光が入っています。放射線も、紫外線も入っていますが、実は見えません。では、見えないからと言って信じられないでしょうか。私たちは見えなくてもそれらを信じています。だから、焼けないように日焼け止めクリームなどを塗りますよね。また、電波も空中に飛んでいるでしょう。でも見えない。しかし人は見えなくても多くのものを信じています。なぜならラジオがいたり、携帯電話が鳴ったりしているからです。空気も見えない。でも、実はあることをみんな信じています。あるから生きています。私たちは見えないものによく支えられて生きている者ではないでしょうか。

見える世界だけを信じるというのは、無知な話してあります。なのにトマスは見てもないから、イエス様の復活は信じられないと強調していたのではないのでしょうか。一度、肉体の目で見たことより、ただ証言や御言葉を耳で聞いて信じる者には御霊がもっと確実な確信を与えて下さるからです。くすしい栄光と喜びもともないます。

御言葉によって信じるということは悟りによって得られる本物の信仰なので、その悟りでこの世を勝たせます。

“あなたがたはわたしを見たから信じたのですか、見ずに信じる者がもっと幸いです。

ローマ人への手紙10章9-10節では、「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」ここで書かれている、イエスキリストを受け入れる時に、しなければならぬ2つのことは何ですか。心で受け入れる口で告白する事です。信じる信仰とは、心で受け入れることですが、口でこれを告白して受け入れなさいということです。一体イエスキリストの何を心で受け入れ、口で告白するのでしょうか。神がイエスキリストを我が罪のため十字架で死なれ、死者の中からよみがえられた(イエスキリストの復活)ということだと聖書は教えて下さっています。

実は日本でも多くの人々はイエスキリストを否定しません。大体認めています。“すごい人だ。聖人だ。”とかです。イエスが偉大な聖人の1人とか、それは信仰でなく知識にすぎない事であり、つまり、それは信仰ではありません。イエスキリストがよみがえった、イエスキリストの復活を信じるということは、イエスキリストが単なる一人の人間ではなく、真の神の御子であり、真の救い主として自分が認め、受け入れることを意味します!

<5.イエスキリストは確かに死からよみがえられました！>

実際当時歴史資料によりますと、イエス様の復活後の1年間、エルサレムだけでイエスキリストを信じうけたユダヤ人は最低 125,000 人を超えたそうです。なぜなら、一番の復活の証拠である空いたお墓は誰でも来て見られるところだったからではありませんか。その空いたイエスキリストのお墓は今も空きになっています。当時よみがえられたイエスキリストは弟子たちに、女たちに、そして同時に500人以上の人々にご自分の姿を現して下さいました。そしてイエス様が天に昇られるときも500人以上の人々がこの光景を目撃します(ルカ 24:33;50-51,第一コリント 15:6,使徒 1:9)。

これらの出来事は単なるイエス様を愛していたある個人に起こったまぼろしのような事ではなく、歴史的な事実と違いありません。そうでなければ、これが聖書にこんなに具体的に証言し、書かれているわけがないからです。

イエスの弟子たちはほぼ全員がイエスキリストの十字架の贖いの死と復活を伝えながら、殉教されました。

今日のイエスの弟子トマス(AD52-72)もインドの南部のチェンナイというところまで行って、よみがえられたイエスキリストの愛と救いの福音を宣べ伝えるながらついに殉教され、今もそこにはトマス記念教会が立てられています。彼らの後から今に至るまで、およそ約 6千6百万人のクリスチャンたち以上の多くのキリスト者たちも殉教されました。

かりにイエスキリストの復活が事実ではないなく、嘘や人が作り上げた伝説であるならば、彼らはこの世で一番愚かで、かわいそうな人々になるでしょう。しかし、イエスの復活を誰かが信じるか、信じないかは関係なく、歴史的に確かな事実です。そのため弟子たちはなんの疑いも、恐れもなく、イエスのためなら、死までも喜んで受け入れることができたのです。「イエスは彼女に言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。26また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。27彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。(ヨハネの福音書 1 章 25-27節)」アーメン!

「そして、もしキリストがよみがえらなかつたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今なお自分の罪の中にいます。18そうだとしたら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったことになります。19もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。20しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。(コリント人への手紙第一15章17-20節)」2024年、復活の主日の朝、どんな人でも、どんなに弱いとしても、絶望な人生を過ごしている人でも、生きておられるイエスキリストと出会えない人はありません。今日改めて復活され愛をもって我々にお出で下さったイエスキリストに感謝しましょう。そして、今日から、復活の主イエスキリストにあって神の愛と救いの喜びのよい知らせを分かち合い、宣べ伝えるイエスキリストの復活の証人として大いに用いられ全クリスチャンプレイズチャーチの信仰の全家族となりますようにお祈り申し上げます。アーメン!